

調査年 月日	1972年9月25日	1973年2月1日
St. I	アオモグサ イトクズグサ タマゴバロニヤ	イソカイメン 3 オヨギイソギンチャク 少
St. IV	リュウキュウスガモ 106 g ベニアマモ マツバウミジグサ 609 g オヨギイソギンチャク 多 ウラキツキガイ 9個 Holothria sp. 2個	リュウキュウスガモ 445 g ベニアマモ 540 g マツバウミジグサ 15 g オキナワモズク 18個体 ヒメイチョウ イバラノリ サメザラガイ 1個体 Ho. sp. 3 " クモヒトデ 2 "

9月上旬と2月下旬の調査から、1㎡当りの顕花植物の冬期の湿重量は夏期の繁茂期に比べしだいに減少している。夏期に繁茂していたリュウキュウスガモベニアマモ群落は11月から12月にかけて葉の部分が枯死、流出がめだち岸辺に堆積するのがみられたが1月中旬になるとその現象はみられなくなり2月中旬まで続いている。

リュウキュウスガモベニアマモ群落の夏期と冬期の藻場は図9と図10に示すように変化している。それは主として波浪による砂、砂利の移動に関連しているようである。夏期に岸の方へ打ち寄せられる砂は冬期になると沖合へ運ばれ、水路や珊瑚礁前縁に滞留しているのがこれまでの砂浜調査や潜水調査から確かめられている。このような砂の移動は藻場周辺の環境を変え、藻場の縁に大きな影響を与える。夏期の藻場は全体的に周囲の砂及び砂利地帯よりわずかに高いが冬期には逆に砂利地帯の方が約10cm高くなる。

このことは同様な海域におけるモズクやその他海藻類やウニを増殖するのに一つの重要な手段の一つである投石事業をする際考慮しなければならない。

リュウキュウスガモベニアマモ群落の生育している底質は主としてミドリインの細片からなり堅くしまっている所以その地下に潜る動物は少ない。このような環境の中で量的に多く生息するのはナマコの一種 *Holothuria* sp. とウラキツキガイ *Codaka paytenorum* とイソカイメン *Halichondria* sp.

リュウキュウスガモの葉の部分にはオヨギイソギンチャク *Bdoceroides mcmurrici* が夏期に著しく繁殖し冬期に減少するのがみられた。この種は藻場全体の食物連鎖を検討する際追求しなければならない重要な一種であると思われる。

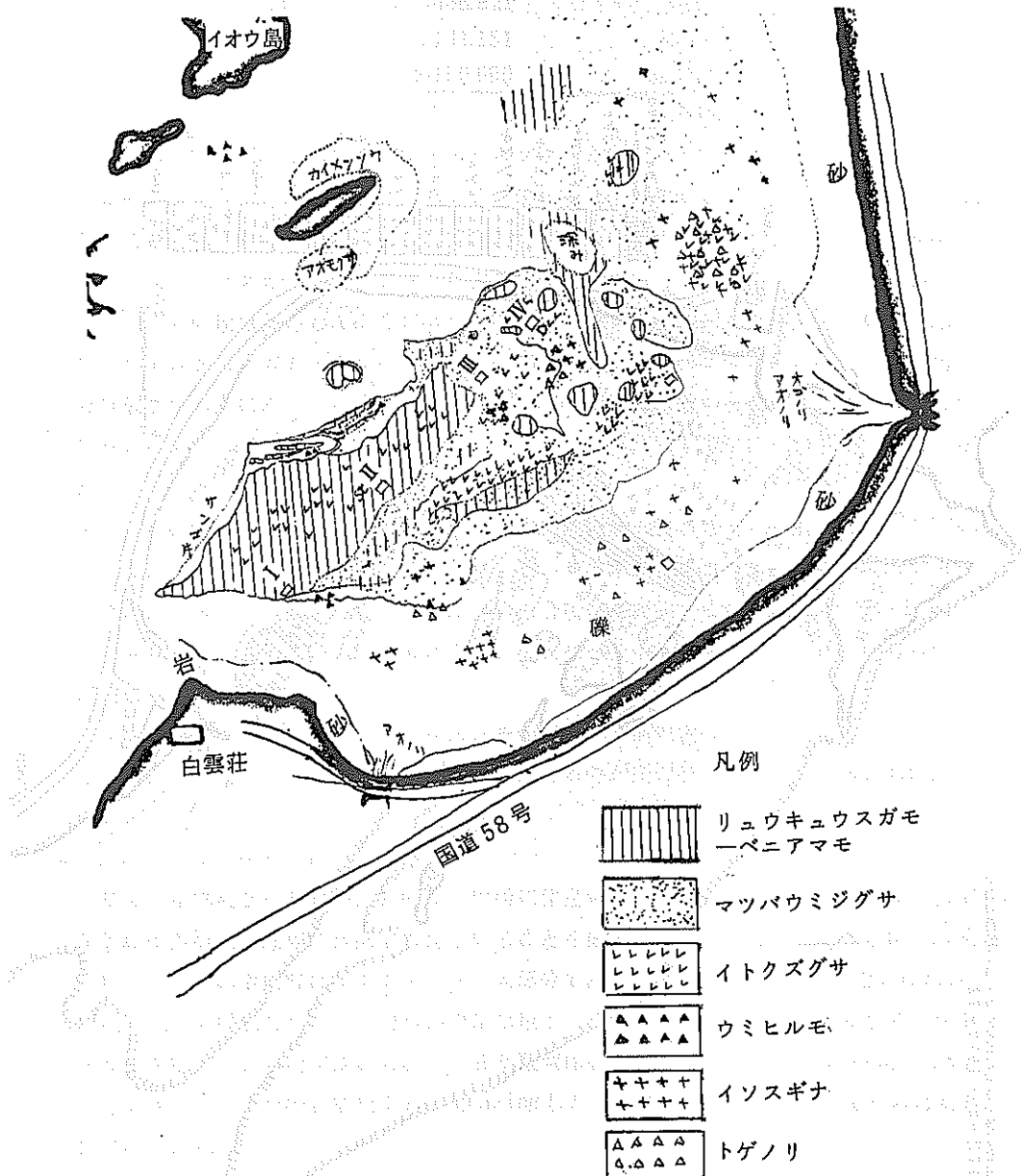
夏期には出現しないが冬期に出現したその他の主な動物をあげるとガンガゼ *Djadema setosum* オオイカリナマコ *Synapta maculata* タツナミガイ *Dolabella auricularia* である。

(ロ) 顕花植物に付着する海藻類の季節的消長について

リュウキュウスガモベニアマモ群落とマツバウミジグサに付着する海藻類で群落をつく

るのはイトクズグサ *Roschera glomerulata*, アオモグサ *Boodlea coacta*, カゴメノリ *Hydroclathrus clathratus*等である。イトクズグサは夏期に優占となるが, 11月上旬から12月上旬にかけてアオモグサが優占となる。また12月下旬から次第にカゴメノリが優占となり2月上旬まで続いている。

図10 屋嘉田潟原の水生顕花植物と海藻の種類と分布(8~10月)1972



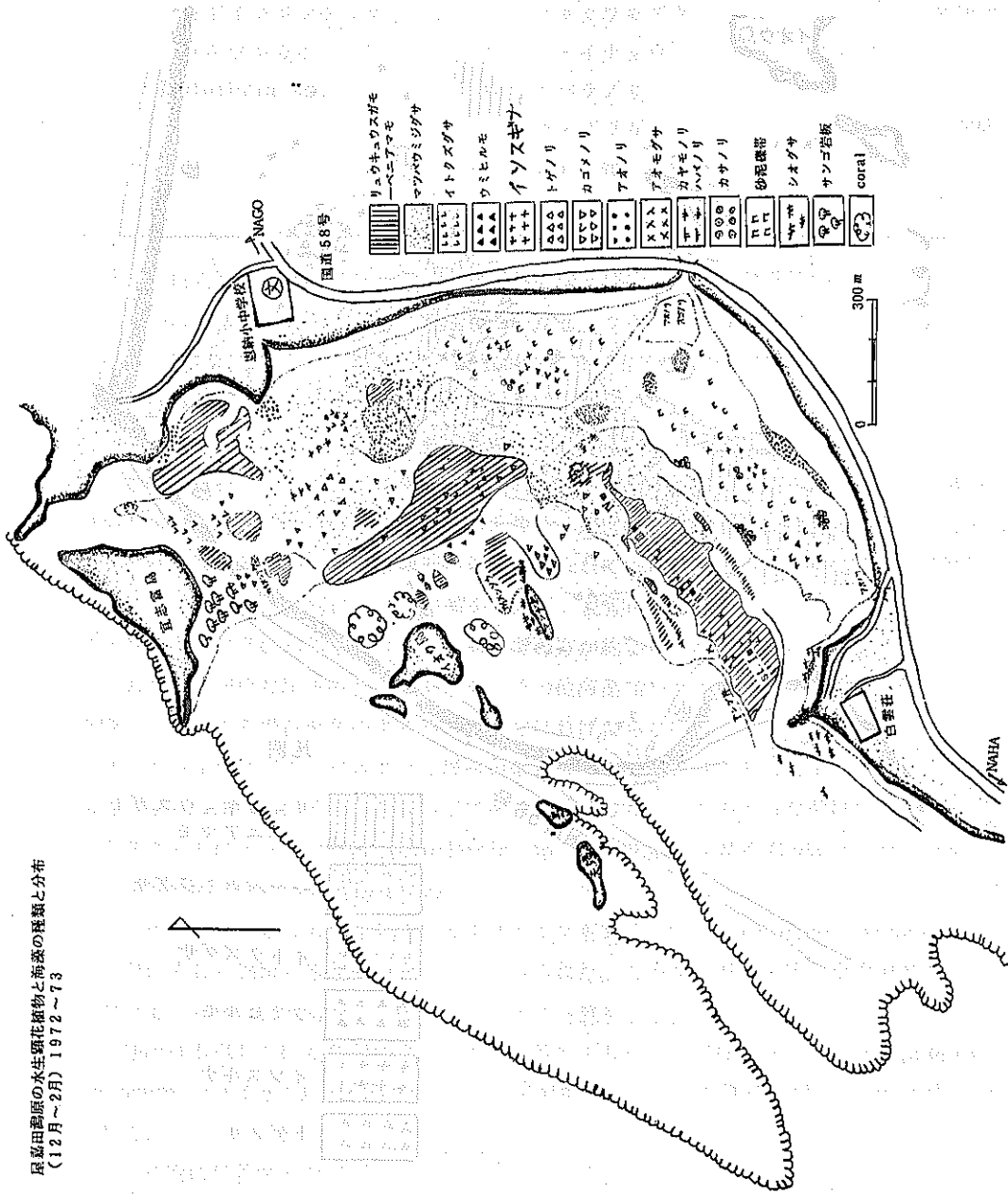


图 11 屋嘉田灣原の水生顕花植物と海藻の種類と分布
(12月~2月) 1972~73